

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫企画展

青洲逸人



渋沢栄一

縁

の
こ
ろ

と本庄の人々



牛久保
歌井恒平

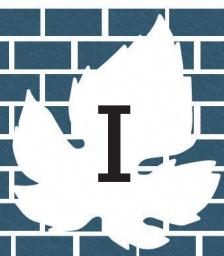
2024

5/18(土) ▶ 9/20(月)

旧本庄商業銀行
煉瓦倉庫
1階展示スペース

渋沢栄一肖像 出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

展示解説
パンフレット



渋沢栄一の生涯

1 尊王攘夷の志士から幕臣、官僚へ

^{しぶさわえいいち}渋沢栄一は、天保 11 年（1840）、^{むさしのくにはんざわぐんちあらいじまむら}武蔵国榛沢郡血洗島村（現埼玉県深谷市）に生まれました。栄一の生家「^{なかんち}中の家」は村有数の豪農でした。特に^{あいだま}藍玉の加工・販売を盛んに行い、栄一も 13 歳頃から父とともに藍の買い付けなどに赴きました。

安政 3 年（1856）、^{おかべはん}岡部藩からの御用金上納を巡り、江戸幕府の政治に不信感を募らせた栄一ら仲間は、文久 3 年（1863）、高崎城や横浜居留地の襲撃を計画しました。実行はしなかったものの幕府に追われる身となり、従兄弟の^{きさく}喜作とともに身を隠していた京都で、元治元年（1864）、^{ひらおかえんしろう}平岡円四郎の仲介で^{ひとつばしとくがわけ}一橋徳川家の家臣になりました。そこで商品作物の増産や藩札発行などを担当して頭角を現し、慶応 2 年（1866）に一橋^{よしのぶ}慶喜が将軍に就任したことで栄一も幕臣となります。慶応 3 年（1867）1 月に徳川昭武（慶喜の異母弟）のパリ万博派遣に同行し渡仏したものの、パリ滞在中に大政奉還の報を受け、明治元年（1868）11 月帰国。その後、慶喜のいる静岡藩へ合流するも、明治 2 年（1869）11 月、明治政府への出仕を命じられました。明治政府に出仕した栄一は、フランスで見聞した新しい文化に感銘を受けていたこともあり、明治 3 年（1870）富岡製糸場建設事務主事となったほか貨幣制度や税制改革、度量衡改正、銀行制度、郵便制度の導入や鉄道敷設など多くの事業を推進しました。



左：和装の渋沢栄一

パリで撮影したもの

右：洋装の渋沢栄一

両写真の出典

：渋沢秀雄『渋沢栄一
（一業一人伝）』時事
通信社、昭和 40 年

2 企業設立と社会事業、平和外交

明治6年（1873）5月、栄一は、当時大蔵卿を務めていた大久保利通との対立が原因で政府を辞官し、民間で活動する道を選びました。同年7月にはに^{おおくぼとしみち}第一国立銀行^{だいいちこくりつぎんこう}を設立し、栄一は大正5年まで頭取を務めました。これを皮切りに紡績や鉄道、海運、造船、セメントやビール、ホテルなど多くの会社設立・育成に関わり、その数は生涯で500社を超えました。地元の深谷でも^{にほんれんがせいぞうがいしゃ}日本煉瓦製造会社を設立しました。

一方で、栄一は社会事業にも力を入れていました。^{とうきょうよういくいん}東京養育院に対しては、明治5年（1872）の設立当初から運営に関わったほか、明治42年（1909）に多くの企業・会社の役員を辞任したのち、福祉や医療、女子教育、奨学などに携わりました。

このほかにも、国際平和事業も推進し、明治41年（1908）には日米の親善・相互理解のための実業家との交流や視察、ワシントン軍縮会議にも出席しました。また昭和2年（1927）には日米人形交流事業を行い、アメリカからは青い目の人形、日本からは答礼人形が贈られました。晩年は民間による平和外交を推進し、ノーベル平和賞候補に2回推薦されています。



扇子（青淵書）

大正11年（1922）／諸井家寄贈資料

栄一が政府を辞したのち、明治5年に民間人となって初めて設立した第一国立銀行。その設立50周年を期に揮毫した扇子。大正11年（1922）の作成と考えられる。

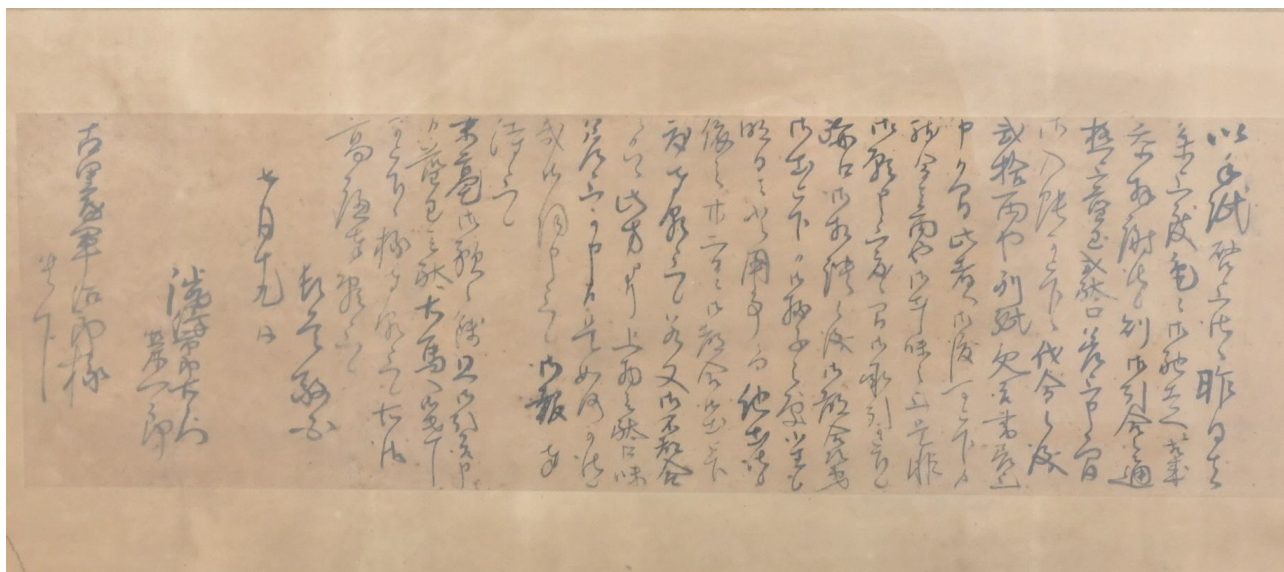


晩年の渋沢栄一

出典：渋沢栄一翁頌徳会『世界の驚異国宝 渋沢翁を語る』実業之世界社、昭和4年

天保 11 (1840)	0 歳	2 月 13 日、武蔵国榛沢郡血洗島に誕生。幼名は市三郎。
弘化 2 (1845)	5 歳	父元助（市郎右衛門）から『論語』『中庸』を学び始める。
弘化 7 (1847)	7 歳	この頃、尾高惇忠から書籍を学び始める。
嘉永 6 (1853)	13 歳	初めて秩父郡へ藍の買い付けに行く。
安政元 (1854)	14 歳	初めて江戸に出る。
安政 3 (1856)	16 歳	岡部藩の代官から御用金の上納をめぐり侮辱される。
安政 5 (1858)	18 歳	名を栄一郎と改名。尾高千代と結婚。
文久 3 (1863)	23 歳	尾高惇忠・渋沢喜作らと高崎城、横浜外国人居留地襲撃を計画するも中止する。喜作とともに京都へ逃れる。
元治元 (1864)	24 歳	平岡円四郎の伝手で一橋慶喜の家臣となり、名を篤太夫と名乗る。
慶応 2 (1866)	26 歳	徳川慶喜、征夷大將軍就任により、幕臣となる。
慶応 3 (1867)	27 歳	徳川昭武の随行でパリ万博幕府使節として渡仏。
明治元 (1868)	28 歳	12 月帰国、静岡藩勘定組頭を命じられるも辞退。
明治 2 (1869)	29 歳	静岡藩勘定頭支配同組頭格勝手掛老中手附。商法会所頭取を命じられ商法会所を開く。11 月明治政府に出仕し、民部省租税正。改正掛が設置され、掛長。
明治 3 (1870)	30 歳	富岡製糸場建設建議、事務主任。
明治 4 (1871)	31 歳	廃藩置県の会議に参加、新貨幣発行。大蔵大丞に任じられ、大蔵省紙幣寮紙幣頭を兼任。
明治 5 (1872)	32 歳	大蔵少輔事務取扱を命じられる。
明治 6 (1873)	33 歳	明治政府を辞官。第一国立銀行設立、総監役に就任。
明治 15 (1882)	42 歳	千代夫人、コレラに罹患し死去。
明治 17 (1884)	44 歳	浅野セメント（太平洋セメント）設立。日本鉄道会社理事委員（のちに取締役）。
明治 19 (1886)	46 歳	竜門社設立。
明治 20 (1887)	47 歳	日本煉瓦製造会社設立、理事（のちに取締役社長）。
明治 27 (1894)	54 歳	熊谷銀行設立に尽力。
明治 29 (1896)	56 歳	第一国立銀行を第一銀行と改称、頭取。
明治 33 (1900)	60 歳	男爵授爵、実業家として初の華族に列する。黒須銀行設立、顧問役。
明治 34 (1901)	61 歳	尾高惇忠死去。井上馨内閣の大蔵大臣就任を招請されるが辞退。
明治 35 (1902)	62 歳	埼玉学生誘掖会設立、会頭。
明治 42 (1909)	69 歳	数えで古希を契機に、第一銀行と東京貯蓄銀行を除く会社役員を辞任。
明治 45 (1912)	72 歳	帰一協会設立、幹事。
大正 4 (1915)	85 歳	アメリカ人宣教師のシドニー・ルイス・ギュリック、飛鳥山邸に来訪。
大正 15 (1926)	86 歳	ギュリックが日米人形交流提案。友情人形がアメリカを出発。
昭和 2 (1927)	87 歳	日本国際児童親善会会長。親善人形歓迎式を主催。青い目の人形が全国の小学校等に配布。
昭和 6 (1931)	91 歳	11 月 11 日永眠。

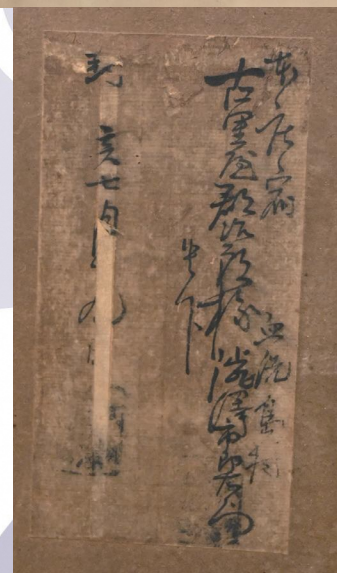
※埼玉県立歴史と民俗の博物館『NHK 大河ドラマ特別展「青天を衝け～渋沢栄一のまなざし～」展示図録』より引用



渋沢市郎衛門・渋沢栄一郎書状

幕末期カ / 中村家文書

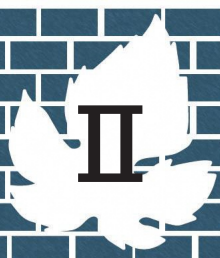
渋沢市郎衛門と栄一郎が本庄宿の商人に宛てた書簡。販売した藍玉の代金の支払いと、藍玉の輸送などについて書かれている。栄一が栄一郎と名乗っていることから、安政5年(1858)～文久3年(1863)頃のものと考えられる。



『論語』卷之三・六・八

明治16年(1883) / 早野家寄贈資料

『論語』は、栄一思想形成に大きな影響を与えた経書である。栄一は、経済活動において道徳も利益追求も共に重視すべしとする「道徳経済合一説」を唱えた。この思想をまとめた代表的な書籍が大正5年(1916)刊行の『論語と算盤』(東亜堂書房)である。



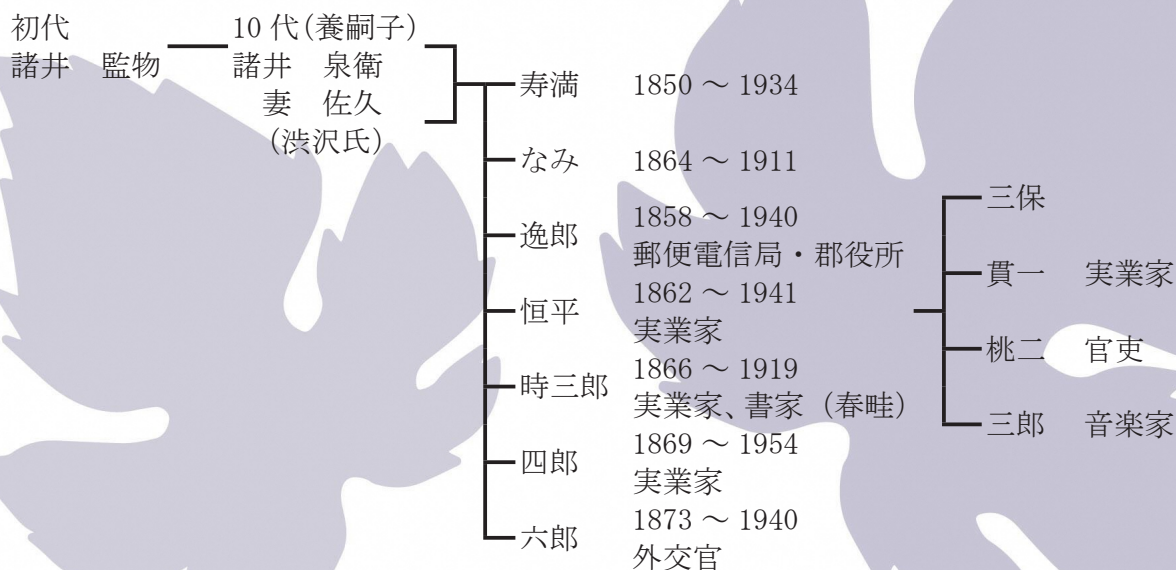
渋沢栄一と本庄の縁 ～諸井家との関係～

1 近代本庄の名家・諸井家

本庄を代表する名家に諸井家^{もろいけ}があります。江戸時代の本庄宿には諸井家が3軒あり、それぞれの家業から「東諸井＝郵便諸井」、「南諸井＝役所諸井・本屋諸井」、「北諸井＝宿屋諸井」と通称されました。幕末期には、東諸井家が南諸井家から養子を迎えたため、両家は親戚関係となりました。一方で、北諸井は、明治維新期に本庄を去っています。

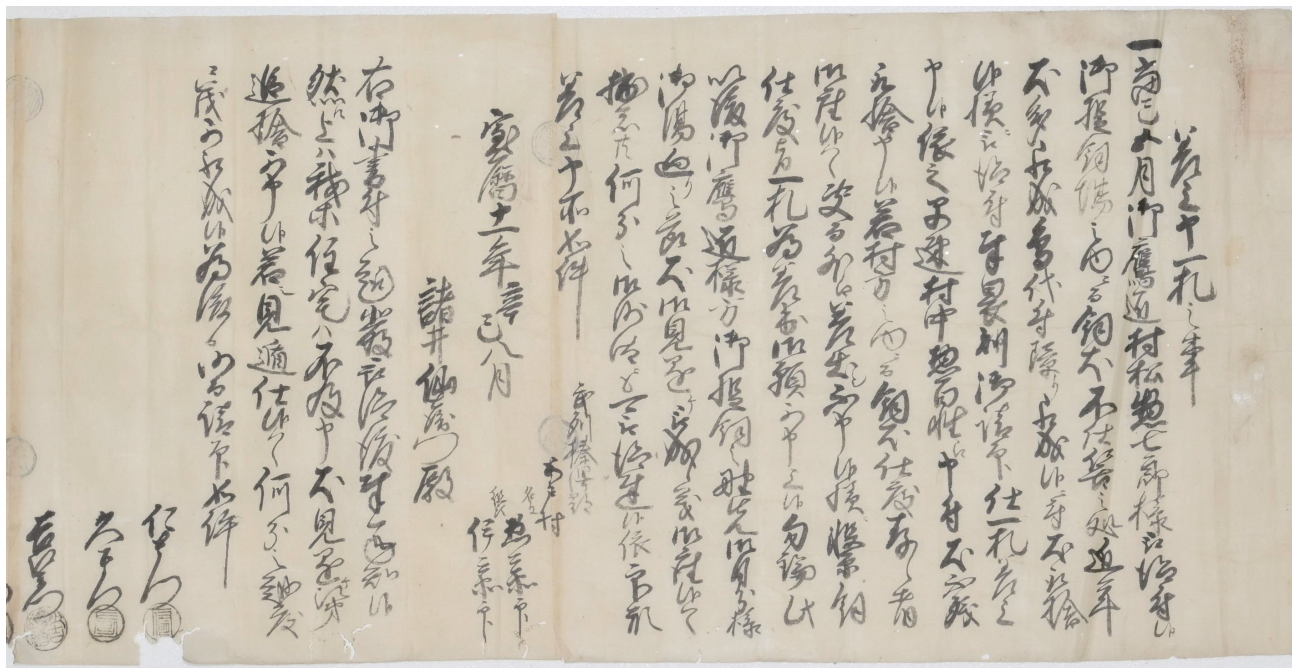
3軒の諸井家のうち東諸井の初代は監物^{けんもつ}といい、永禄年間（1558～1569）に上野国邑楽郡藤川一本木^{こうずけのくにおうらぐんふじかわいっぽんぎ}（現群馬県邑楽町）から本庄に移ったと伝えられます。2代～6代目は、江戸幕府より野廻鳥見役^{のまわりとりみやく}に任じられていましたが、6代目の傳五右衛門^{でんごえもん}が横暴な態度を取ったため、役を召し上げられてしまい、困窮生活となったと伝えられます。なお、7代目仙右衛門^{せんえもん}の妻加與^{かよ}は、初代渋沢宗助^{そうすけ}の娘でしたが、夫である仙右衛門が亡くなってすぐの文政3年（1820）8月に亡くなりました。

9代目仙右衛門（寛政4年（1792）～明治7年（1874））は、17歳のときに商売で身を立てることを決意し、絹・太織商となりました。律儀な性格で貯蓄にも勤めたことで、27歳のときには本庄付近の大絹商とまで言われるほどになり、一家を衰退から救いました。鉄心と号し、晩年は歌道と茶の湯を好みました。明治7年（1874）に隠居所からの火事の際に受けたやけどがもとで亡くなりました。



諸井家家系図

本庄市役所総務課秘書広報係編『武州本庄宿ふるさと人物史1』より一部抜粋



差上申一札之事

宝暦 11 年（1761） / 金井家文書

宮戸村名主から 5 代目諸井仙左衛門^{せんざえもん}に宛てられたものの写し。捉飼場^{とらえかいば}（将軍が鷹狩を行う鷹場の外側に設けられた鷹の実地訓練や鳥の調達に用いられる範囲）内での犬の飼育の禁止を誓約する内容となっている。仙左衛門は江戸幕府から野廻鳥見役に任じられており、その職務内容を物語る資料である。



▲ 蓋

ほかい
行器

年代不詳 / 諸井家寄贈資料

諸井家で使用されたもの。蓋^{ふた}には諸井家の家紋が入っている。

2 諸井泉衛と渋沢家

諸井泉衛（^{せんえい}文政10年（1827）～明治16年（1883））は、南諸井から東諸井の9代目仙右衛門の養子に出た人物です。養父である仙右衛門と同様に泉衛も糸繭の商売を生業の中心としていました。しかしながら、慶応元年（1865）に蚕種買い入れに失敗して大きな損失を出したことで仙右衛門から叱責を受け、家から追放され勘当同然となったといわれています。商才には疎い面があった泉衛ですが、青年期には^{おしはん}忍藩の^{よしかわはざん}儒者芳川波山に師事し、漢詩や和歌を学びました。また、ひととき新しいものの好きで、明治維新後、本庄で一番早くチョンマゲを切り落とした人物としても知られていました。その後、経緯は不明ですが、明治5年（1872）に^{ていしん}逋信頭^{まえじまひそか}前島密の依頼で自宅に本庄郵便取扱所を開設、のちに本庄郵便局の局長に就任しました。

泉衛の妻佐久は、三代目渋沢宗助の次女で、^{つねへい}渋沢栄一とは従姉妹の関係でした。この縁からか、泉衛と佐久の次男恒平が日本煉瓦製造会社や秩父セメント株式会社の役員に抜擢されたほか、三男の^{ときさぶろう}時三郎（^{しゅんけい}春畦）が深川の渋沢邸に寄宿するなど、両家の間には強い繋がりがありました。



木札

明治時代 / 諸井家寄贈資料

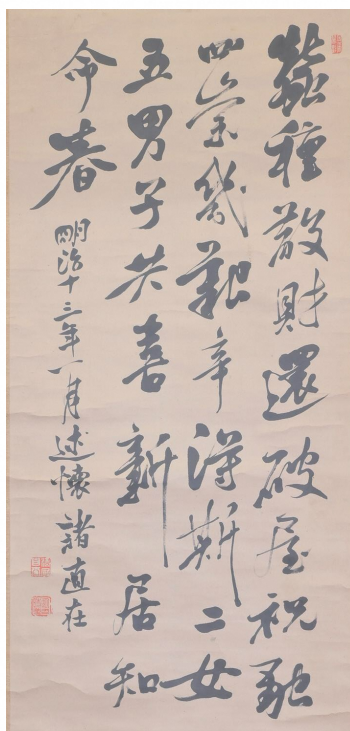
諸井恒平が家業である糸繭商に従事していたことを示す木札。上部に穴が開いており、門に掛かっていたものであろう。恒平は、明治20年（1887）の日本煉瓦製造への就職を機に東京へ本拠を移したため、本資料はそれ以前に使用されたものと考えられる。



諸井泉衛家族写真

明治時代 / 諸井家所蔵

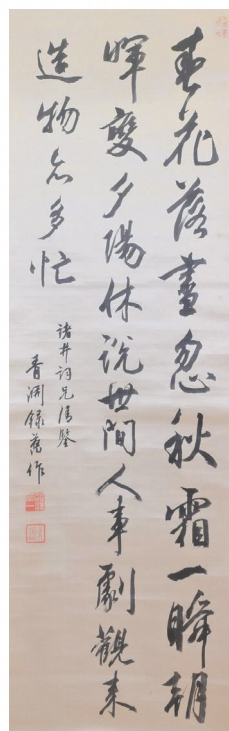
中央でグラスを持つ人物が泉衛。その右が妻の佐久。



諸井泉衛書

明治 13 年 (1880)
諸井家寄贈資料

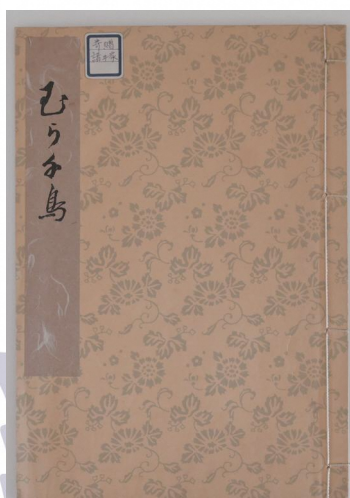
泉衛が書いた書。新しく自宅（現存する諸井家住宅）を建築したことを期に筆をふるったものであろう。併せて自身が五男二女に恵まれたことなどを織り込んでおり、泉衛が家族を大切にしていた様子がうかがえる。



渋沢栄一書

明治時代
諸井家寄贈資料

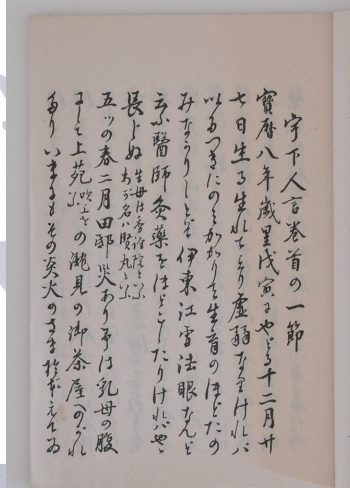
栄一が書いた書で、諸井家に贈ったものである。



『むら千鳥』

明治 13 年 (1880) / 諸井家寄贈資料

松平定信が行った窮民救済のための備蓄制度に寛政 3 年 (1791) 創設の七分積金がある。節約して減額となった入用の一部を積み立てたもので、災害時の救済に用いられ、明治維新後には「共有金」となり、運用を任じられた栄一らによって東京府の公共事業のために活用された。栄一は、七分積金を創設した松平定信のことを終生尊敬しており、大正 15 年 (1926) に楽翁記念会（定信の顕彰会）を開催し、定信の著作を筆写した『むら千鳥』を配布した。本資料は、渋沢敬三（栄一の孫）が栄一の 23 回忌（昭和 28 年）に際し大正 15 年に刊行された本を複製したもの。





諸井家家族写真

明治44年(1911) / 諸井家寄贈資料

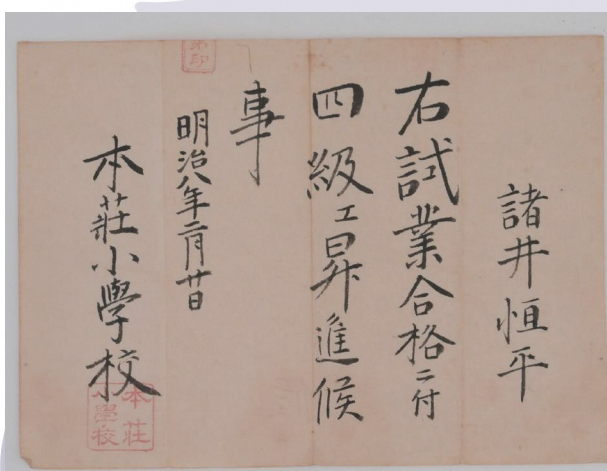
諸井泉衛の二十七回忌の際に撮影した写真。泉衛の妻・佐久や6人の子どもの姿が写っている。なお、大正元年(1912)年12月に佐久は死去しており、本写真は佐久の最晩年の姿を写したものである。



着物(諸井佐久所用)

明治時代 / 諸井家寄贈資料

諸井泉衛の妻佐久が着用したもの。



恒平進級証明書

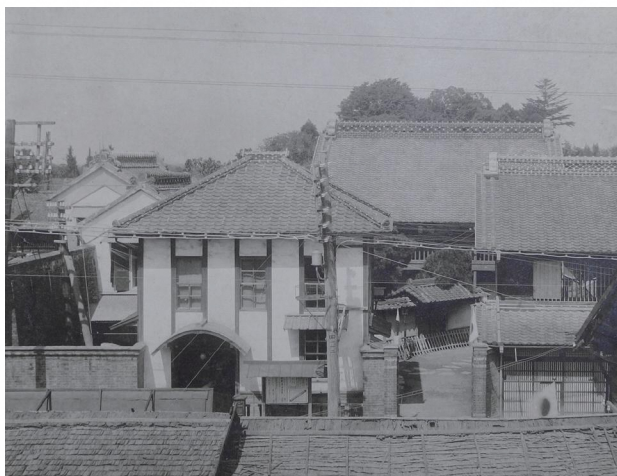
明治8年(1875) / 諸井家寄贈資料

諸井恒平の本庄小学校進級試験合格証明書。明治5年公布の「学制」では、6歳～9歳が下等小学、10歳～13歳までが上等小学の二段階制だった。同年頒布の「小学教則」では各等それぞれ8等級に分け、半年ごとに1級ずつ進級するように定められた。なお、試験で不合格の者を落第とする制度もあった。

3 諸井家住宅と事業

東諸井家の建物は、度々火災に見舞われています。江戸時代に火事で被災したほか、明治6年と明治10年には全焼しました。明治10年の火災の後、「焼けても簡単に建て替えられる家を建てる」という方針で建てられたものが、現在、埼玉県指定有形文化財に指定されている「諸井家住宅」です。

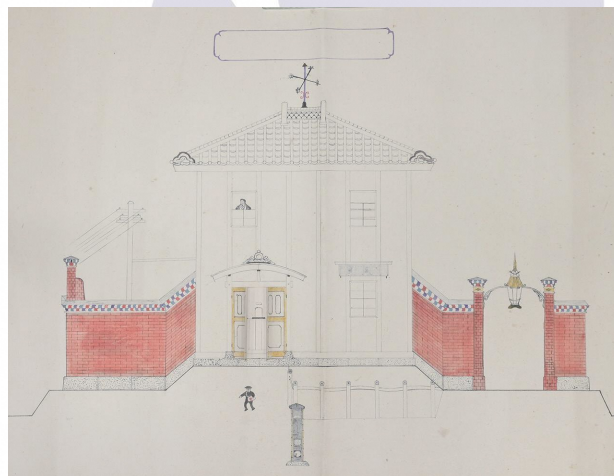
泉衛には5人の息子と2人の娘がおり、息子たちは泉衛亡き後、各々がそれぞれの事業で活躍しました。ここでは、恒平と六郎^{ろくろう}に焦点をあてて紹介します。



本庄郵便電信局と諸井家住宅

近代 / 諸井家所蔵

旧本庄郵便局（写真手前）と現存する諸井家住宅（写真奥）を写した古写真。諸井家住宅の建築年は、棟札から明治10年(1877)と推定される。建築にあたっては諸井泉衛が出入りの大工を横浜まで連れて行って、横浜居留地の西洋館を実地見聞したという。旧本庄郵便局の建物は明治23年(1890)に完成した。それまでは局長を務めた諸井家の自宅を仮局舎として用いていた。



旧本庄郵便局絵図

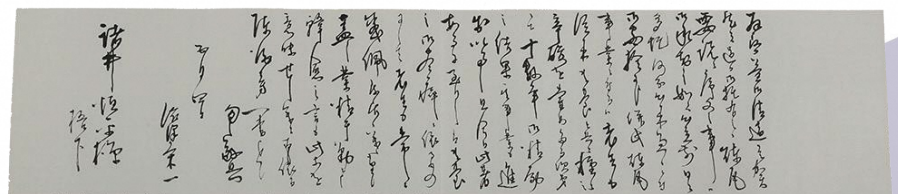
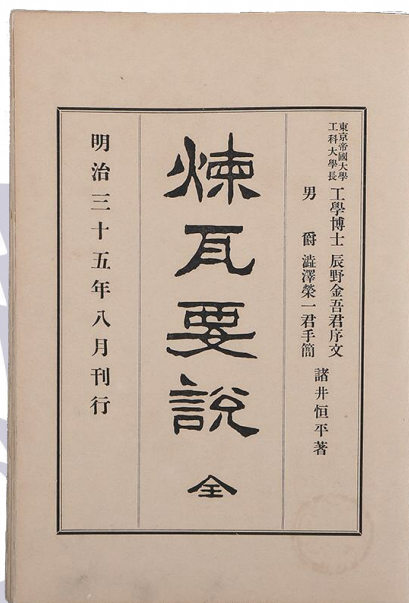
近代 / 諸井家寄贈資料

明治23年(1893)建設の旧本庄郵便局の外観を描いたもの。2階窓には外を眺める人物、屋根の上の風見鶏、建物前の郵便配達夫と当時の黒いポスト、煉瓦で造られた門など、当時の郵便局の外観が詳細に描かれている。特に、1階扉部分が開くようになっており、1階入り口の郵便窓口が覗き込めるようになっているのが特徴としてあげられる。

諸井家と事業① 諸井恒平 (1862 ~ 1941)

諸井恒平は、文久2年(1862)に生まれました。生涯で様々な事業に携わった人物で、明治11年(1878)に16歳で本庄生糸改所頭取になり、明治19年(1886)には父泉衛の後任で本庄郵便局長に就任しました。明治20年(1887)になると、渋沢栄一の勧めで日本煉瓦製造会社に就職しました。栄一自身も明治27年(1894)から同社の取締役社長に就任しましたが会社を訪れることは少なく、栄一の指示のもと恒平が実質的に運営を担っていました。また、恒平は、栄一が主導した次世代経営者の育成団体竜門社^{りゅうもんしゃ}の運営にも参画しており、栄一と恒平の関係の深さがうかがえます。

その後も明治43年(1910)には秩父鉄道株式会社取締役就任のほか、大正12年(1923)には秩父セメント株式会社を創立しました。一方で、恒平には「企業は人にあり」という考えが根底にあり、大正8年(1919)に栄一が設立した協調会^{きょうちようかい}へも参加しました。昭和12年(1937)6月には秩父鉄道株式会社の取締役会長となるなど晩年まで事業に携った恒平ですが、昭和16年(1941)2月に肺炎で死去しました。



恒平が記した日本最初の本格的煉瓦研究書。序文は辰野金吾^{たつのきんご}が書いている。栄一も序文執筆の依頼を受けていたが、欧米視察のため多忙で書けなかったことを書簡の中で詫びている。ほかにも、恒平とともに日本煉瓦製造会社経営に携わり「種々辛酸を嘗め」苦勞したが、その発展は十数年にわたる恒平の努力の賜物であると恒平の労をねぎらっている。この書簡は写真版として同書に掲載されている。

諸井恒平著『煉瓦要説』と渋沢栄一書簡

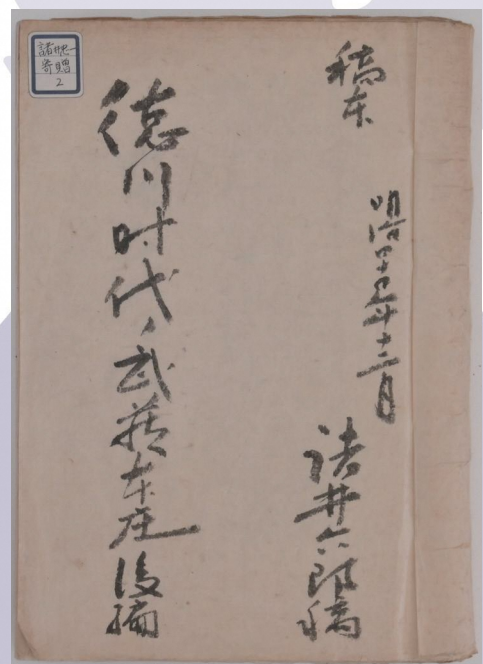
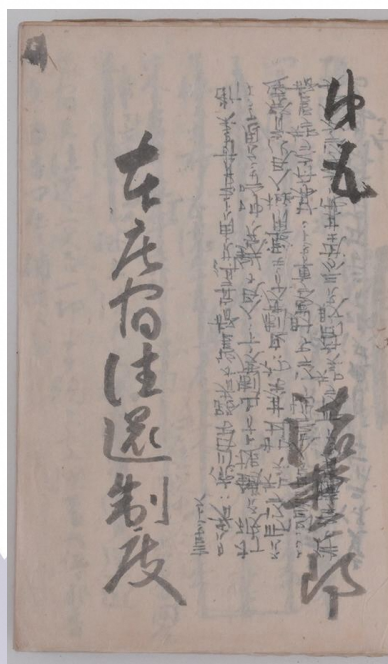
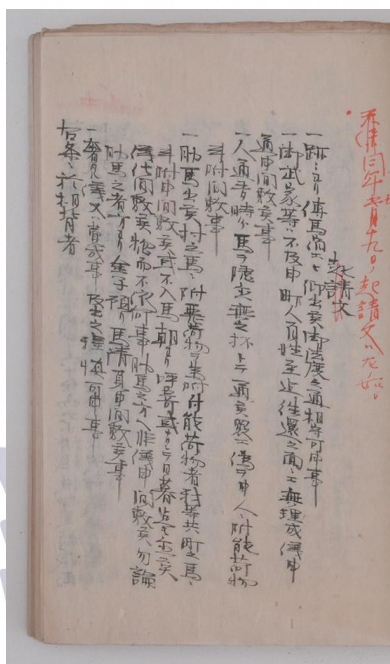
明治35年(1902)

深谷市蔵(写真提供: 渋沢栄一記念館)

諸井家と事業② 諸井六郎（1872～1940）

諸井六郎は、明治5年（1872）に生まれました。明治29年（1896）に東京帝国大学（現東京大学）を卒業し、その翌年には外交官・領事館試験に合格しました。六郎は、中国・上海領事をはじめ、イギリス・ロンドン領事、ベルギー・アンヴァンス領事、ドイツ大使館一等書記官、アメリカ・ホノルル総領事、イタリア大使館参事官、アルゼンチン特命全権公使等を歴任しました。

また、六郎は、海外貿易についても関心が強く、外務大臣小村寿太郎のもとで、日米修好通商条約で放棄されたままであった関税自主権の完全回復にも尽力しました。大正15年（1927）に職を辞し、昭和15年（1940）に病氣のため68歳で死去しました。



こうほん とうくわがじだいのむさしほんじょう
稿本 徳川時代之武蔵本庄

明治44年（1912） / 諸井家寄贈資料

六郎は、職務の傍ら、地元本庄の江戸時代に関する資料の収集に努めた。その成果をまとめて出版したのが『徳川時代之武蔵本庄』である。本資料は、出版のために資料をまとめ、文章を推敲する中で書かれたものと思われる。なお、六郎が収集した資料の中には、すでに原本が現存しないものもあり、六郎が写しを作成したことで今日まで伝わったものも多い。



もろいろくろくんついういほうろく
『諸井六郎君追悼遺芳録』

昭和 16 年（1941） / 諸井家寄贈資料

※上：明治 45 年 3 月 6 日条約改正記念写真
（前列右から 3 人目が六郎）

下：昭和 15 年 10 月 6 日諸井六郎追憶会
発起人（幣原喜重郎）挨拶

昭和 15 年（1940）に亡くなった六郎の追悼のため息子の忠一が編集・刊行した。生前交流のあった人々が文章を寄せており、外交官時代に交流があった幣原喜重郎（後の第 44 代内閣総理大臣）が発起人となって開催された追憶会の様子も写真で収録されている。幣原喜重郎は、追悼文の中で六郎について「予の最も畏敬せる同僚の一人」と述べている。



Ⅲ 渋沢栄一と塙保己一

温故学会の設立と塙保己一の顕彰活動

盲目の国学者・塙保己一は、延享3年（1746）、武蔵国児玉郡保木野村（現本庄市児玉町保木野）に生まれました。7歳の時に病により失明しましたが、15歳で江戸に出て盲人一座・当道座へ入門、雨富須賀一検校の下勉強に励みます。そして、国学の教育研究の場である和学講談所の設立や、全国の貴重な書物を集めて530巻666冊にまとめた大文献集・群書類従の出版など多大な功績を収めました。その後、文政4年（1821）、76歳で当道座の最高位・総検校の位につき、同年9月に天寿を全うしました。

活躍した時代が異なる保己一と栄一ですが、実は深い関係があります。明治42年（1909）、栄一は、保己一のひ孫塙忠雄や宮中顧問官井上通泰、文学博士芳賀矢一とともに、保己一の偉業顕彰のため温故学会を設立しました。そして、昭和2年（1927）には、温故学会会館（東京都渋谷区）の建設にも大きく寄与しました。温故学会では、群書類従版木（重要文化財）17,244枚の保管や福祉事業、各種啓発事業に現在まで取り組んでいます。

渋沢栄一の塙保己一への思い ～温故学会会館開館式祝辞より～

栄一は、昭和年の温故学会会館の開館記念式典でこう述べています。

「（前略）故塙先生の事業、且つ古今に稀なる群書類従の版木に残っておりますのを後代に伝えたいと云ふことが我々塙先生と生地を同うする者には、此念慮が別して深かったのでござります。（後略）」

保己一と栄一は同じように武蔵国北部の出身でした。式辞にあるように「生地を同うする者」という同郷意識が強くあったものと思われます。



①昭和2年温故学会会館開館記念写真（左から3人目が渋沢栄一） ②温故学会会館外観 ③群書類従の版木倉庫 ④塙保己一肖像（①～③温故学会所蔵、④本庄市所蔵）

【参考文献】

- ・栗田たけし「諸井家談義」(『本庄市史拾遺』第10号、1970年)
- ・小暮秀夫『武蔵国児玉郡誌』(名著出版、1973年)※原著は1927年
- ・諸井六郎『江戸時代本庄史』(歴史図書社、1981年)※原著は『徳川時代之武蔵本庄』(1912年)
- ・本間清利『御鷹場』(埼玉新聞社、1981年)
- ・本庄市役所総務課秘書広報係『武州本庄宿ふるさと人物史Ⅰ』(本庄市、1989年)
- ・土屋喬雄『渋沢栄一』(吉川弘文館、1989年)
- ・本庄市史編集室『本庄市史 通史編Ⅲ』(1995年)
- ・埼玉県教育委員会・埼玉県立文書館『埼玉人物事典』(1998年)
- ・戸田市立郷土博物館『寺子屋から明治期の学校風景―学校教育の原点を求めて―』(1999年)
- ・渋沢研究会『新時代の創造 公益の追求者・渋沢栄一』(山川出版社、1999年)
- ・柴崎起三雄『本庄人物事典』(私家版、2003年)
- ・島田昌和『渋沢栄一 社会起業家の先駆者』(岩波新書、2011年)
- ・井上潤『渋沢栄一 近代日本社会の創造者<日本史リブレット人85>』(山川出版社、2012年)
- ・公益財団法人渋沢栄一記念財団『渋沢栄一を知る事典』(東京堂出版、2012年)
- ・埼玉県立文書館『埼玉県立文書館収蔵文書目録第53集 諸井(三)家文書目録』(2014年)
- ・本庄市教育委員会文化財保護課『本庄市の文化財 散策ガイドブック』(2017年)
- ・若松良一「蚕糸盛業地における郵便線路と馬の利用―埼玉県立文書館寄託の旧本庄郵便局史料から―」(『文書館紀要』第33号、2020年)
- ・『青天を衝け <渋沢栄一とその時代>』(NHK出版、2021年)
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館『NHK大河ドラマ特別展 青天を衝け』(2021年)
- ・安中市観光課『渋沢栄一と安中 パネル展パンフレット』(2021年)
- ・白河市歴史民俗資料館『松平定信と渋沢栄一～時代を超えたつながりと白河～』(2022年)

【展示協力】

本展示会の開催にあたり、以下の機関・方々にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

深谷市教育委員会 、 株式会社諸井家 、 公益社団法人温故学会

※本リーフレットは、企画展「縁～en～渋沢栄一と本庄の人々～」(会期:令和6年5月18日(土)～9月2日(月)、会場:旧本庄商業銀行煉瓦倉庫)の開催に合わせて作成した。執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章を秋山寛行、第Ⅲ章・年表及び編集を松浦誠(共に文化財保護課職員)が行った。

『縁～en～渋沢栄一と本庄の人々～』

編集 本庄市教育委員会文化財保護課

発行日 令和6(2024)5月18日

本庄早稲田の杜
HONTO-WASEDA NO MORI MUSEUM
ミュージアム